

顕密のハビトゥス：神仏習合の宗教人類学的研究

白川，琢磨

<https://doi.org/10.15017/1931992>

出版情報：九州大学，2017，博士（人間環境学），論文博士
バージョン：
権利関係：

氏名	白川 琢磨			
論文名	顕密のハビトゥスー神仏習合の宗教人類学的研究ー			
論文調査委員	主査	九州大学大学院人間環境学研究院	准教授	飯嶋秀治
	副査	九州大学	名誉教授	関 一敏
	副査	九州大学	名誉教授	服部英雄
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	浜本 満

論文審査の結果の要旨

本論文は、「日本人の宗教とは何か」を文化人類学的に解明するため、先行研究が文化人類学は海外の異文化を研究対象とし、国内の固有状況は民俗学が研究対象としてきたために薄く、しかしながら後者の研究には超歴史的なあつかい等に批判があるため、「宗教民俗」を「歴史」を踏まえて文化人類学的に研究する必要を説く。具体的には、クロード・レヴィ=ストロースの音韻の三角形、ロドニー・ニーダムの多配列項目論、ピエール・ブルデューのハビトゥス論など構造主義以降の理論的枠組みと歴史学的には黒田俊雄の顕密体制論を大きく援用した。

こうした観点から、日本の宗教の原型を「神仏習合」に措定し、約 10 年にわたる北部九州のフィールド調査をもとにして、その解明を目指したのが本論である。第 1 章「神仏習合へのアプローチ」では、理論的枠組みを述べ、第 2 章「民俗宗教と神仏習合ー大飯ぐらいと綱引き」では神仏習合をとらえる際に「寺社」および「顕密」の両軸からとらえる必要があることを福岡県西部の大飯ぐらいと佐賀県東部の綱引きから明らかにし、宗教的環境への影響を論じた。第 3 章「神楽と鬼ー神仏習合の展開」では、福岡県東部の豊前神楽および北部九州における鬼（竹崎観世音寺の修正会鬼祭および大善寺玉乗宮の鬼夜、国東天然寺の修正鬼会）をとり上げ、現在の実演と文書の分析から、本来的には加持祈祷および「再生の呪力」が想定されたところに、変化が加えられてきたことを論じた。第 4 章「山岳寺社と神仏習合ー文化資源論への展開」では英彦山をとりあげ、そこにヒコ・ヒメ・ミコの三元構造があり、これが民間に転化して現在の緒象徴へとなったことを論じた。第 5 章「結論ー神仏習合と文化資源」では、以上を総括し、中世期に寺社勢力が広げた顕密のハビトゥスを想定することで、近代以前の多項目配列的な神仏習合の基本構造（人・神・仏の三角形）が、近代の神仏分離令という単配列項目革命により崩れ、現在の日本の宗教意識と宗教人口のズレに結びついたことを論じた。

公聴会では口頭による試験を行い、最終諮問では、宗教学（関一敏）、歴史学（服部英雄）、人類学（浜本満）それぞれからの質疑が投げかけられた。

宗教学からは、音韻の三角形を用いたモデルは説明モデルとしては了解できるものの、その説明モデルを現場の動きに接近させるにはさらなる説明が必要な面があること。歴史学からは根拠に用いた資料の語彙から判断するに、時代想定に注意をすることがあること。人類学からは、ハビトゥス、多配列項目、文化資源などの術語により高度な説明が求められること。いずれも専門的な立場からの質問が投げかけられた。これに対し、著者からは、一定の説明は可能であるものの、一定の限界があることも認め、さらなる研究の必要性も認められた。

よって、本論の構想のスケールがおおきく、取り扱う領域も中世から現在に至る日本の宗教民俗の宗教学、歴史学、人類学と、多岐にわたるがゆえの限界がありつつも、各領域で一定の成果を認められたことを以て、本論文は博士（人間環境学）の学位に値するものと認める。